

# むつごろう通信

23号

2013年

9月30日発行

新センター長の逸見です。よろしくお願ひします。

はじめまして。前任の滝川清教授に代わって、新しく第4代センター長を拝命しました逸見泰久（へんみやすひさ）です。海洋生態学、特に干潟・浅海域に生息する底生動物の生活史・行動生態を専門としています。



出身は北九州市で、大学・大学院ともに九州大学で学びました。福岡市の多々良川・和白干潟や天草市富岡、沖縄県漫湖干潟などの泥質干潟で、ヤマトオサガニ・ヒメヤマトオサガニの生活史の比較研究を行い、それが博士論文になりました。当時、ハクセンシオマネキの研究のために合津臨海実験所を何度も利用しましたが、そこが自分の職場になるとは思いもしませんでした。名称は合津マリンステーションに変わりましたが、合津臨海実験所に常勤講師として赴任して今年で16年になります。

ところで、この合津マリンステーションは、このたび、「教育関係共同利用拠点」として文部科学大臣の認定を受けました（次頁参照）。スタッフの不足など多くの問題はありますが、今後、「有明海・八代海の広大で多様な干潟・浅海域と、そこに住む豊かで特徴的な生物との実体験を通して、海洋環境に関する科学的な理解と関心を育て深める教育拠点」を目指すこととなります。

一方、沿岸域センターの今後を考えると、こちらも多く課題があります。沿岸域センターで中心的な役割を担って来られた滝川教授が来年3月をもって定年退職され、工学系

の専任教員が不在になります。沿岸域センターは発足当時から理工融合型のセンターとして研究教育を進めてきたため、工学系の専任教員がないのは痛手です。今後、改組を進め、新たな沿岸域センターとして再出発することも必要かもしれません。

有明海・八代海の問題も、多くは未解決のままです。例えば、巨大化・頻発化する自然災害に対し、環境と防災をどのように両立させるかについては、未だ合意できる回答が得られていません。赤潮・貧酸素水塊・泥化などの問題も現況把握の段階にあり、具体的な環境改善策の実施に関する研究は緒に就いたばかりです。現在、我々は「八代海再生プロジェクト」（H23～27）を軸に、「有明海・八代海の調査研究」を推進していますが、今後は、両海域の真の再生に向けた具体的な取り組みを進める必要があるでしょう。

これらの課題を推進するため、我々は研究・教育に日々励んでおりますが、有明海・八代海を始めとする沿岸域の保全・再生は、大学の研究だけでは限りがあります。言うまでもなく、国や地方自治体、NPOや住民の方々の連携や協力が不可欠です。今後とも、皆様の御協力・御支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



ハクセンシオマネキ